『学び合い』実践者の「気になる子」の認識に関する考察

○佐々木　譲（上越教育大学教職大学院）
西川　　純（上越教育大学教職大学院）
（j275621j@myjuen.jp）

要約

本研究では，公立小学校・中学校・高等学校の『学び合い』実践者にアンケート調査を行い，『学び合い』実践者がどのように「気になる子」を認識しているのか，また「気になる子」への具体的な手立て，その際に心掛けていることは何かを明らかにすることを目的とする。

キーワード：気になる子，『学び合い』，教師の認識，アンケート調査

Ⅰ　問題の所在

文部科学省（2012）[1]は，共生社会の形成に向けインクルーシブ教育システムの構築を目指し，障害があることにより，通常の学級における指導だけでその能力を十分に伸ばすことが困難な子どもたち一人一人の障害の種類・程度等に応じ，特別な配慮の下，特別支援学校や小学校・中学校の特別支援学級，あるいは「通級による指導」における特別支援教育の充実を図っている。また児童生徒の実態[2]として，特別支援学校に在籍，特別支援学級に在籍，通級している児童生徒が増加傾向にあり，義務教育段階において占める割合は約2.7%である。また，医師による診断を受けていない特別な配慮を要する児童生徒の調査[3]では，知的発達の遅れはないものの，学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒が通常学級に6.5%在籍している。

そうした現状を踏まえつつ，文部科学省は「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」[4]において，全ての学校や学級に，発達障害を含めた障害のある子どもたちが在籍する可能性があることを前提に，子どもたち一人一人の障害の状況や発達の段階に応じて，その力を伸ばしていく必要性を述べている。

また学習指導において[5]は，子ども一人一人に応じた「主体的・対話的で深い学び」を実現していくために「アクティブ・ラーニング」の視点による授業改善の必要性を説いている。「アクティブ・ラーニング」の１つとして西川純が提唱する『学び合い』[6]があり，篠崎ら（2016）[7]はアクティブ・ラーニングの志向性を有する実践理論の１つとして『学び合い』を挙げている。増田ら（2013）[8]は『学び合い』における特別な教育的な支援を必要とする中学生の学びの実態として，他の生徒と関わり合いながら学習に取り組むことを明らかにした。西川（2008）[9]は通級による指導を受けている児童を「気になる子」と捉え，『学び合い』の授業においては教師及び介助員の指示なしに他の児童と関わり問題解決に至ることが可能であると述べている。また，西川ら(2015)[10]においては特別支援学級内における『学び合い』や通常学級との合同『学び合い』の教育的効果について取り上げている。

一方，西川（2008）[11]は通常学級において教師が学習面・行動面において著しい困難を実感している児童生徒についても「気になる子」とし，『学び合い』の授業によって自ら学習意欲を表明し，友人達との学習の輪に入っていくことを示した。また三崎ら（2012）[12]は，小学校において一斉指導が行われる授業中で突然の立ち歩きや机に突っ伏して授業に関心を示さなかったりする児童生徒を「気になる子」とし，『学び合い』の授業では突っ伏す回数が減少し，周りの児童との意識的な関わりが増え，テストによる成績の向上を明らかにした。

以上のように『学び合い』における「気になる子」という言葉が指している児童生徒の姿は様々であるが，『学び合い』実践者である小学校，中学校，高等学校教員が実際に「気になる子」をどのように捉えているかは明らかになっていない。

また，西川（2015）[13] では，『学び合い』の授業においては集団に働きかける必要性を述べているが，実際に「気になる子」へどのような手立てを行っているかについては明らかになっていない。それらを明らかにすることで今後，通常学級での授業における子どもの学習内容理解に向けた授業改善，教師が困り感を抱えた児童生徒への支援に寄与されることが期待できる。

Ⅱ 研究目的

本研究では，公立小学校・中学校・高等学校の『学び合い』実践者の「気になる子」の認識や具体的な手立て，またその際に心掛けていることを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ 研究方法

1．調査期間　2016 年 11 月から 12 月

2．調査対象

『学び合い』実践者　公立学校教員　計 35 人
(2016/11/30 現在)

3．調査方法

久保山ら（2009）[14] を参考にアンケート作成し，公立の小学校，中学校，高等学校の教員に記述式のアンケート（表 1）を配布した。

4．分析方法

アンケートから小学校，中学校，高等学校教員の『学び合い』実践者の「気になる子」の認識とその手立てをキーワードでカテゴリー分け比較し，認識，手立て，心掛けにどのようなものがあるかを分析する。

表 1　調査項目

1．回答者の属性
（1）担任・担外・特別支援学級
（2）校種
（3）教職歴
2．「気になる子」について
（1）気になる子という言葉を聞いてどんなイメージがありますか
（2）あなたの学校にどんな気になる子がいますか（授業内/授業外）
（3）気になる子に対して具体的にどのような手立てを講じていますか。（授業内/授業外）
（4）気になる子に接する際に心掛けていることはありますか。またそのように心掛けている理由をお答えください。

Ⅳ 結果

調査中のため学会当日に発表する。

引用参考文献及び

1）文部科学省：「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）概要」，2012.

2）文部科学省：「特別支援教育について-1. はじめに-」，2009.

3）文部科学省：「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」調査結果，2012.

4）文部科学省：「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」，2016.

5）前掲４）

6）西川純：「すぐわかる！できる！アクティブ・ラーニング」，p. 31，学陽書房，2015.

7）篠崎祐介，黒川麻実，國友芽衣，岩村考治：「主体的・協働的な学びを支援する教師の実践理論への意識：『学び合い』実践者へのフォーカスグループインタビューを通して」，言語文化学会論集，(46)，pp. 201-222，2016.

8）増田雄樹，三崎隆：「中学校理科『学び合い』の授業における特別な教育的な支援を必要とする生徒の学びの実態に関する研究」，臨床教科教育学会誌，13(2)，pp. 113-120，2013.

9）西川純：「気になる子の指導に悩むあなたへ」，pp. 48-62，東洋館出版，2008.

10）西川純，間波愛子：「『学び合い』で『気になる子』のいるクラスがうまくいく！」，pp. 122-127，学陽書房，2015.

11）前掲 9)，27-41.

12）三崎隆，戸井田未菜，小松幹，西川純，桐生徹，水落芳明：「理科授業における「気になる子」の『学び合い』の授業による変容に関する事例研究」臨床教科教育学会誌，12(1)，pp. 55-74，2012.

13）前掲 10)，pp. 98-109.

14）久保山茂樹，斉藤由美子，西牧謙吾，當島茂登，藤井茂樹，滝川国芳：「『気になる子ども』『気になる保護者』についての保育者の意識と対応に関する調査-幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言-」，国立特別支援教育総合研究所研究紀要，36，pp. 55-76，2009.